

ふじのきいせきはくつちょうさけんちせつめいかい 藤ノ木遺跡発掘調査現地説明会

1 藤ノ木遺跡へようこそ

三条市教育委員会では、国道403号三条北バイパス道路建設工事に伴い、新潟県より委託を受けて、大字井栗地内にある藤ノ木遺跡の発掘調査を8月から行っています。この遺跡は、平成12年度に一部発掘調査を行い、室町時代の井栗地域の有力者の屋敷跡が見つっています。今年度の調査では、今からおおよそ1200年前の平安時代初め頃に建てられた米を収納した倉と考えられる建物跡が発掘されました。これは、蒲原郡の古代史を考える上で重要なものです。この機会に現地を見学していただき、先人が残してくれた地域の財産である遺跡の保護にご理解をいただければ幸いです。



今年度の発掘調査区（南から）

今年度は約2700㎡を調査し、調査区の北西より平安時代初め頃の建物（倉）1棟、井戸1基、溝数条が発掘されています。そのほか西側より続く室町時代の遺構や遺物が見つっています。



平成12年度の発掘調査区（南から）

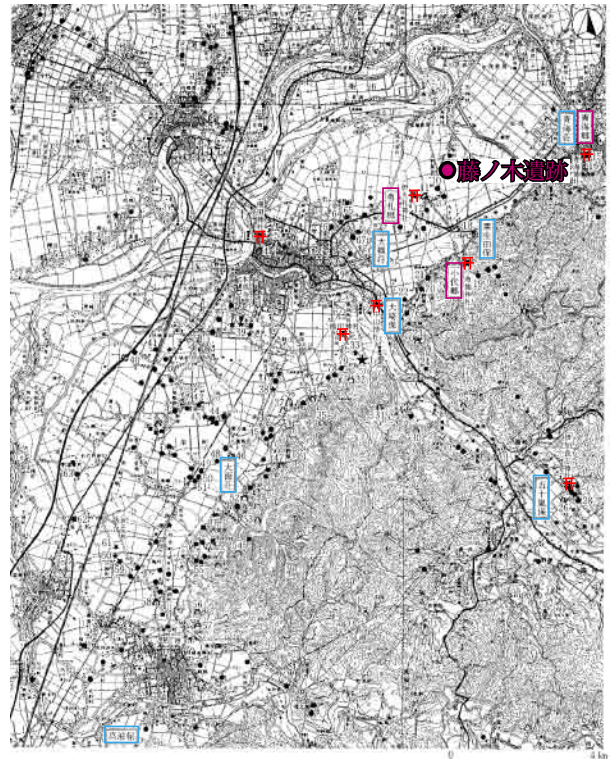
今年度の調査区の西側部分約7500㎡を調査し、室町時代の遺構や遺物がたくさん発掘されました。また、奈良時代の建物跡1棟が調査区北側で見つかりましたが、奈良時代・平安時代の遺物量は僅かです。

2 藤ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡

藤ノ木遺跡は、三条市の北東部に位置し、三条市大字井栗甲字藤ノ木にあります。地元のみなさんが「藤の木さま」と呼んでいる三条市指定文化財「万葉の藤」の脇にあります。遺跡の西側には、近年改修された布施谷川が南北に流れ、標高は約6.3mで現在の水田面の約30cm下にあります。

周辺には、たくさんの遺跡があります。北側の山手には、古墳時代前期と後期に造られた三王山古墳群があります。また、藤ノ木遺跡の北に隣接する白山A遺跡からは6世紀中頃の須恵器のはそうが出土し、白山B遺跡では、ほ場整備に伴う調査により建物跡や井戸などが発掘され、灰釉陶器や墨書土器などが出土しています。南西には7世紀末の須恵器が出土し、遺跡規模が大きい井栗乙郷遺跡などがあり、市内でも特に遺跡が集中する地域です。

そして、南西の井栗集落にある伊久礼神社は、延喜式に載る神社とされ、井栗地区が蒲原郡勇礼郷の中心地域に比定されています。



遺跡の位置と周辺の遺跡

3 発掘された遺構 建物（倉）

この度の調査で掘立柱の建物跡が1棟見つかりました。柱穴は隅丸方形で1辺が約1.2～1.4m程の大きなもので全部で16基あり、柱間が約2.1m程で3間×3間（約36㎡）の総柱建物で、ほぼ正方形で畳約22枚相当の建物となります。

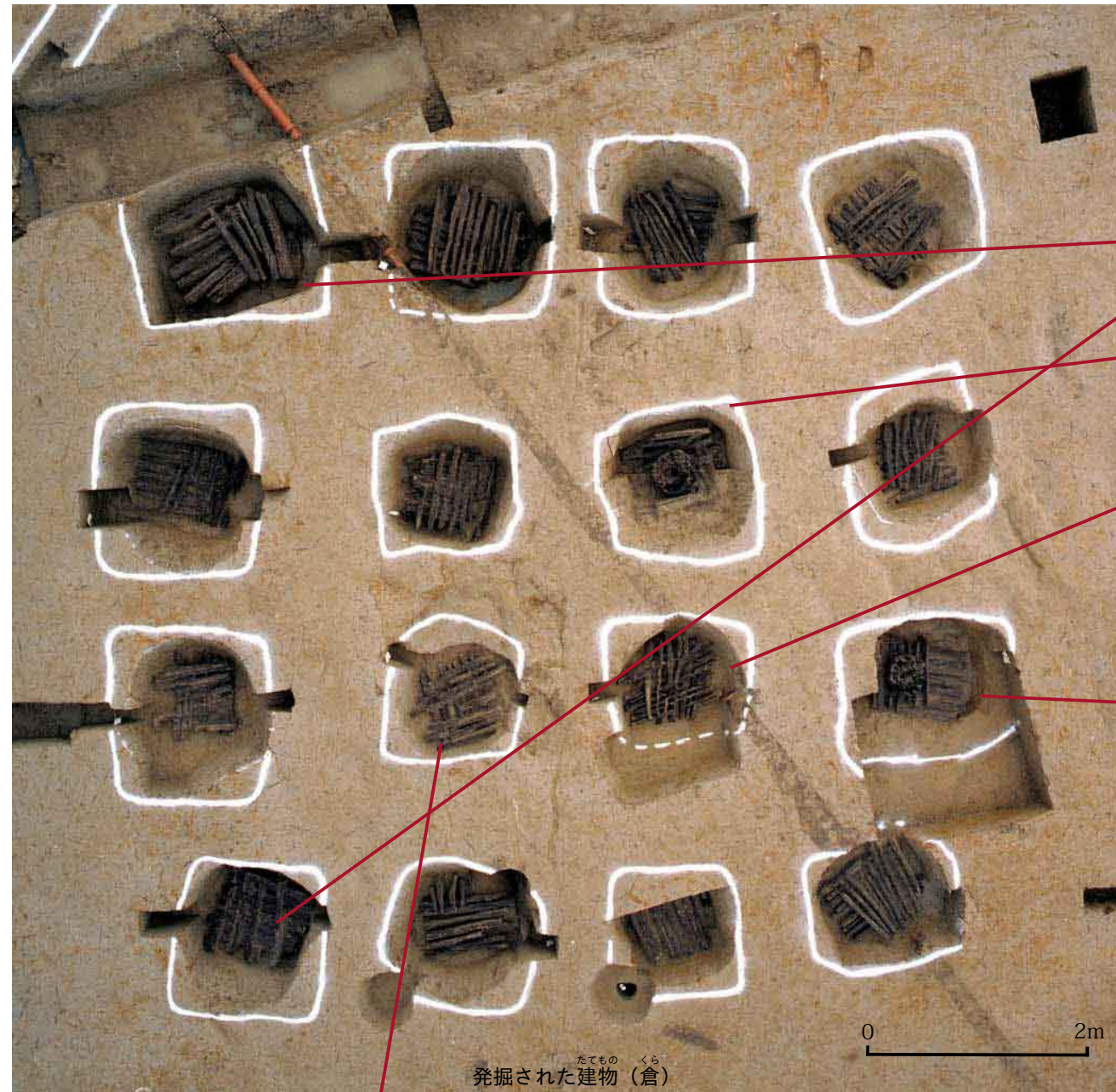
この柱穴の約30cm程下の底面には木材を断ち割った部材を筏状に並べて敷き詰め2段組から3段組で、交差するように組み合わされています。これが「筏地業」という工法で、部材は長さ50cmから1m、太さ約3cmから約10cmのものがあり中には鋭利な刃物で加工された痕跡を残す部材もありました。

この筏地業の上に柱をのせて建物を建てています。柱は丸柱で直径約40cm以上のものが2本見つかり、他の柱穴でも筏地業の部材そのものに建物の重みで窪んだ直径約40cm以上の柱の痕跡を残していて、建物の全ての柱は40cm以上のものを使用していたことが伺えます。また地面と柱穴の土の色が同じことから、柱を立てたあと直ぐに埋めたことがわかります。柱は2本以外見つかっておらず大半が抜き取られたと考えられます。

この建物のすぐ北側にある室町時代の溝の東西の軸線と、建物の南北方向の軸線（北から約20°東）は、並行・垂直関係にはありません。このことから室町時代とは時期が異なり、遺構の中から出土した遺物から8世紀末～9世紀初頭（奈良時代末～平安時代初め）と考えられています。

この時期の遺物は、当遺跡では非常に少数です。

この建物跡は、①筏地業という堅固な基礎工事を行っている②非常に太い柱を用いている③当時の一般集落で見つかる総柱建物よりも規模が大きい、の3点から倉であった可能性があります。「筏地業」の工法を用いた遺跡としては、島根県斐川町の出雲郡衙の正倉跡の「後谷遺跡」（奈良時代～平安時代初め）山形県八幡町の寺院跡の「堂の前遺跡」（平安時代）などがあり、近現代では旧帝国ホテルにも用いられ関東大震災を耐えたとも言われています。日本でこの工法を用いた建物遺構は少なく、新潟県では初めてです。



発掘された建物（倉）



須恵器

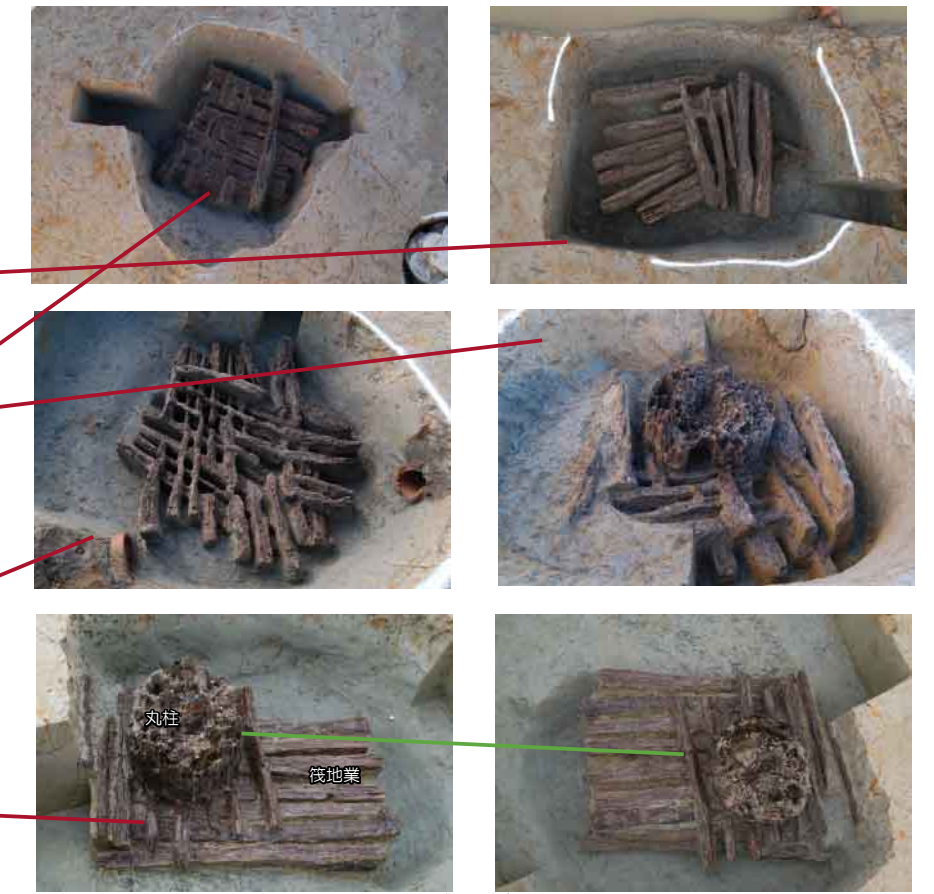


須恵器

はしらあな 柱穴から見つかった須恵器



発掘された藤ノ木遺跡



井戸

筏地業と丸柱

現在の大きさは直径約0.8m・深さ約0.5mで、円形素掘りの井戸が1基発見されています。その中から建物と同じ時期の須恵器が出土しています。井戸廃絶後に室町時代の溝が作られました。溝が作られる前の大きさは直径約1.2m・深さ約1mだったと思われます。調査で全て掘り上げましたが、今もお水がしみ出しています。



室町時代の溝

平安時代の井戸



須恵器

井戸に埋まった土のようすと見つかった須恵器

みぞ溝

建物の北西側と東側にあり、建物の南北方向の向きとほぼ同じ溝が数条見つかっています。また北西側の溝からは建物と同じ時期の遺物が出土しています。倉を他の地域と区分けする区画溝とも考えられ、建物との関連が推測されます。



発掘された溝

4 室町時代の藤ノ木遺跡

平成12年度の調査と合わせて多く見つかったのが、今からおおよそ600年前頃の室町時代の遺構と遺物です。特に注目されるのは、幅1.5m、深さ0.7m、一辺の長さが40～50m程度の大きさのコの字型の溝で区画された屋敷跡で、建物や井戸などが発掘されています。遺物は、中国から輸入された青磁や国内産陶器、木製品、鉄製品、石製品などの豊富なくらしの品々が見つかりました。この屋敷は、井栗地域の有力者の住まいと推定されます。また、遺跡からの出土例が少ない鉄鍋がほぼ完全な形で見つっています。これは、市内大崎地域を本拠とした鋳物作り職人集団である大崎鋳物師によるものと推定され、当時の生産や流通など三条の金属産業史を考える上で重要なものです。



見つかった室町時代の暮らしの品々

発掘された藤ノ木遺跡

5 古代のロマン広がる 万葉の地 伊久里

井栗周辺地域は、当時の行政の末端組織である郷や延喜式内社の比定地が集中する地域です。そこで見つかった平安時代初め頃に建てられた倉はどのようなものなのでしょう。この倉は、①筏地業②太柱③平面積が大きいなどの点から、重量物を収納した施設と考えられ、当時倉に収納される重量物は米であるので、米倉と推定されます。このような規模の倉は、当時の税である租などの徴税物の米を収納する施設であった郡の役所の正倉やこの頃郷に設置される郷倉などがあります。いずれも数棟以上が配置されますが、ここでは、平成12年度と合わせて現時点では1棟しか見つかりません。また、奈良時代後半から、越後国においても在地の豪族が開墾、私田経営を積極的に行い、力を蓄えてきた頃です。財物を献納し、官位を得るものもいるほどです。豪族が、郡などの正倉をモデルに建てた倉の存在の可能性も考えられます。この倉について、いろんな可能性は指摘できますが、今後の周辺地区の遺跡調査と合わせて慎重に検討していく必要があります。

いずれにしてもここに米倉があり、倉の区域として管理されたのは事実です。火災などを防ぐため、居住区などとは隔離され、倉周辺部には、空白域があったようです。このことは、倉の周囲から、建物跡が見つかっておらず、遺物もほとんど出土していないことから裏付けられるでしょう。

この倉に隣接して、市指定文化財「万葉の藤」があります。万葉集に載る「伊久里の森の藤の花」とはこの地を詠んだものといわれています。まさしく「万葉の地 伊久里」を選んで建てられたかのようなこの倉は、この場所がもつ重要性を我々に伝えてくれるものかもしれません。そして、地元の皆さんが大切に守り伝えてきたものが、今まさに歴史をひもとく鍵となってきました。

古代のロマン広がる「万葉の地 伊久里」が改めて注目されます。



市指定文化財「万葉の藤」



井栗集落にある現在の伊久礼神社



伊久礼神社にある市指定文化財「万葉の歌碑」